

平泉 澄氏インタビュー (一)

このインタビューは、昭和五十三年十一月二十五日から二十七日までの三日間(二十五日は打ち合せのみ)、福井県勝山市平泉寺町の、白山神社事務所を兼ねた氏の自宅で、東京大学百年史編纂のための調査の一環として行われた。聞き手は東京大学文学部教授(現亜細亜大学教授)伊藤隆、東京大学百年史編纂室室員(現青山学院大学教授)酒井豊、同(現清泉女史大学助教授)狐塚裕子、同(現文部省教科書調査官)照沼康孝である。この模様的一端は、伊藤隆『日本近代史—研究と教育』(一九九三年)、照沼康孝「百年史編纂室と私」(『東京大学史紀要』第六号、昭和六十二年二月)を参照されたい。

平泉澄氏略歴

明治二八(一八九四) 二月二十六日、福井県大野郡平泉寺村に、父白山神社 祠官平泉恰合、母貞子の長男として出生。
 明治四〇(一九〇七)・四 福井県立大野中学校入学。神皇正統記、太平記、徒然草等を在学中に読む。
 大正 元(一九一三)・九 第四高等学校入学。
 大正 四(一九一五)・六 東京帝国大学文科大学史学科入学。

大正 七(一九一八)・七

東京帝国大学文科大学史学科国史学科卒業。卒業論文「中世に於ける社寺の社会的活動」。卒業生総代として天皇より銀時計を受ける。

大正 八(一九一九)・六

大学院特選給費生となる。

大正一〇(一九二一)・一〇

森下逸子と結婚。

大正一二(一九二三)・三

東京帝国大学文学部講師となる。国史学第二講座分担。講義は「中世に於ける精神生活」、演習参加者は中村栄孝、坂本太郎、岩生成一、相田二郎、吉村茂樹等。

大正一五(一九二六)・四

東京帝国大学より文学博士の学位を受ける。東京帝国大学助教授となる。この年、「中世に於ける精神生活」「我が歴史観」「中世に於ける社寺と社会との関係」出版。

昭和 五(一九三〇)・三

在外研究のため、渡欧。ドイツ、ハンガリー、フランス、オランダ、イギリス、アメリカ等を廻る(翌年七月帰国)。

昭和 七(一九三二)・二

東大朱光会創立。「国史学の骨髄」出版。この年、昭和天皇に進講、海軍大学校で講義を行う。

昭和 八(一九三三)・四

青々塾を開く。この年近衛文麿と知り合う。

昭和 九(一九三四)

陸軍士官学校、海軍大学校等で講義。この後陸海軍諸学校等で度々講義。

昭和一〇(一九三五)・四

黒板勝美の後任として、東京帝国大学教授となる。

昭和一二(一九三六)・三

この年、教学刷新評議会委員となる。

昭和一五(一九四〇)・三

満州国に行き、皇帝に進講。

昭和二〇(一九四五)・八

東京帝国大学教授辞職願提出。十月かに受理される。

昭和二二(一九四六)・一

白山神社宮司となる。

昭和二三(一九四八)・三

公職追放となる(二十七年四月解除)。

昭和五九(一九八四)

二月一八日死去。

昭和五十三年 十一月二十六日

平泉 澄先生 午前の部

○今日はどういふふうにお話ししていただけますか。

平泉 大学の歴史をずっと見てみると、私どもの関係した中でいちばん大きいのは、昭和七年の展開（大本）です。それからそれに匹敵あるいはそれ以上の変化というのが昭和二十年。その間がちょうど私が大学におったときで、私が経験してきたことが多い。そして今、その事情を知っておる人がほとんどないというほどに少ないですから、その間のことをお話します。

まず、昭和七年を中心にお話ししようと思いますが、その前に大きな変化は明治の初めです。

今の学士会館がどうしてあそこにあるかご承知ですね。

○あれはあそこに大学があったからということでは。

平泉 大学の何があったのですか。

○開成学校の……。公立講堂と今の学士会館と、あの道の両側がありますね。それで第一番中学が公立講堂のほうにあって、そのあと開成学校を新築したときに、今の学士会館のところに開成学校の校舎を建てた……かな。

平泉 それが大学ですか。

○いや、あれは専門教育機関で大学ではありません。

平泉 大学はどこにあったのですか。

○明治の初年に大学と言っていたものが文部省に名前が変わって、東京大学ができるまでは一時大学と名の付くものはなくて、明治十年四月に東京大学というものが、それまでの開成学校と医学校を合併してできた。

平泉 大学というものはなかったんですか。

○はい。

平泉 あったんですよ。

○それは？

平泉 東大の医学部はどこからきたのですか。

○あれは神田の和泉橋通りのほうにあって、そこから明治八年に本郷の加賀邸内に移ったというふうには、われわれは聞いております。公式どおりに覚えておりますけれども。

平泉 公式では、そういう名前ではないでしょう。

○東京医学校となっています。

平泉 それはそれだけでしょう。あれが大学東校なんです。一ツ橋は大学南校です。なぜ南校というんですか。

○それは昌平坂の学問所に対して、神田和泉橋というのは東にあって。

平泉 そうそう、それで東校、南校でしょ。つまり昌平橋が大学なんです。大学と称しておる。その大学の東だから大学東校、こっちは大学南校。ほかの名前はあるが、大学のときには両方が大学南校、大学東校と言っていた。その大学というのは文部省を兼ねておった。それは大学なんですよ。大学と言っておった。その証拠があるんです。あれが大学であって、職員も大学の何々と称したんです。

そんな昌平坂なんていうものじゃないんですよ。

これが明治三年ですが、なかなか貴重なものなんだ。いろいろな地図はあるけれども、このときのものには非常に少ない。ここに大学があるでしょう。これが今の医科歯科大学の場所です。これが大学で、これで大学東校、大学南校でしょう。ちゃんとそれはあるし、大学と称しておった。

○大学というのは行政機関だったから。

平泉 行政機関であると同時に最高学府も兼ねていたんです。

○明治四年八月、大学を文部省……。

平泉 中央の大学本部というものがやめられるからそうなった。大学なんです。

○大学としては続いていた？

平泉 続いていたというか、大学の中心部は欠落した。その大学の長官を何と言ったか。

○別当ですね。

平泉 そう、文部大臣兼大学総長ですね。そのときの大学はほんとうの大学で、日本全部の最高学府です。文部省は行政を担当する。学問のほうは大学が担当する。これが日本の全部の教育の中心です。その長官が松平春岳公。そのときになぜそれをやめるようになったのですか。

○松平春岳公の終りというのはいらないですね。

平泉 春岳公が終りではなく、大学が終わったんです。それは国学と漢学のけんかなんです。わしみたいな感じの強いのがいたんだ

ろうね。国学と漢学との争いで、それが統制がつかなくなって全部やめ、大学別当も辞職された。そのときの別当は松平春岳公で、その下は秋月種樹。日向の高鍋の殿様。これはその春岳公のお子さんなんです。松平慶民子爵は最後の宮内大臣です。これは非常に重大な額ですよ。それは終戦後にきた人がここからのぞいて、今の日本にこんな額を掲げている人はいない。いいんですか。いいんですかっていくら日本が戦争に負けたからといって、忠義を奉じて何が悪いのだ、これがなくなったら日本は滅びるんだと言って掛けておるんです。

去年の春は全国の九つの電力の社長がみんなここへこられた。まだ雪があるからお宮へお参りはできませんよと断ったけれども、くるといふ。長男が、お父さんの顔を見にくるんだから、断ることはないですよという。それでみんなきて、四月の初めだけでも雪が深いのでお参りはできなかった。しかし、みんなこれを見て驚いて、写真を撮って帰ったんですよ。忠義墳骨髄（忠義骨髄を墳む）蘇東坡の手紙にある文句です。それを慶民先生は非常に喜んで使われて、それをまた私が書いてもらったんです。

とにかくこれは覚えておいてください。大学はあった。ありがたいうちです。この地図一枚でわかる、大学とこれは今の聖廟でしょう。昌平坂学問所の跡ですわいな。そしてこれが大学。南校。非常にはつきりしている。

ところが、私がまだ明確に土地を押えておらないのは、ここへ移ってくる前が上野の忍ヶ岡に林家の学校があったでしょう。その場

所がどの地点か、私はほんとうはまだ知らない。それは元禄にここに移る。その前はここですが、この場所は明確にしていない。とにかく忍ヶ岡という、不忍池の近くです。

これは非常に珍しいもので、ふつうの骨重的な価値はないんですが、私の父の大事に持っておった地図で、これは大きな問題が一つ押えられる。東京大学があつて、それが内部で分解作用を起こして、これんちでやまった。そして偶然のことで南校と東校だけが残って、それが明治十年にまとまって大学ができた。しかしながら、国学、漢学の系統はそのときになくなっていくんです。統合されたものは南校の系統ですから、山本先生なんかもしばらくであれをやめられるんです。いろいろなごたごたがあつたんですわ。その辺のところ

が大学の歴史としては、ひとつの重大な関節です。われわれが知ってからあとの何ともいへん大きな変化は大正七年。どういふ変化が起こつておるかという、そのときが天皇陛下下の行幸があつての卒業式が大正七年で終り。恩賜の時計がそれで終り。

恩賜の時計を見たことがありますか。

○それを拝見させていただけたらと、夕べから話をしておつたのですけれども。

平泉 そうだろうと思つて出しておきましたが、持たんでおいてください。宝物でも何でも手に持たないことが、ひとつの大事なことなんです。というのは、持てばみんな指紋が付く。これはこのお宮の宝物でもみんなそうで、みんなにさわられると物が傷んでしまふんです。さわらないことがひとつ。私は仕方ない、さわりますが。

○先生に表と裏にやっていたいただきますから、よろしくお願いいたします。

平泉 これが不思議なことで、何回かみんなに呼び出されるのですが、恩賜の時計と一緒にもらった人でもずいぶん多かったです。一緒に並んでいたんですからみんな知っている。それが今、恩賜の時計をだれがもらったのか、だれが持っているか、何もわからない。芥川の息子さんがアナウンサーか何かをしているテレビ局で、十年ほど前に企画があつて、恩賜の時計をもらった人にみんな出てもらうということだったんです。それでテレビ局ではずいぶん手を広げて探したけれども一人も出ない。まことに不思議なことなんです。結局、私だけいつも出るんです。どういうわけか、それはわからんけれども、私これがこれをいただいたときに朝日新聞の記者が見えられていろいろ話をして、それが朝日新聞に出たんです。非常にいい記者でね。朝日はもとはよかつたんです。今は悪いです。それはもう全然ものが変わつて、本質的な大きな変換が終戦のときにあつたんです。前の朝日というのは、ほんとうに礼儀は正しいし、学問は優れておるし、あれだけのきれいな記事というのは、あとはちょっとないですね。非常にいい人でした。私はまだ下宿におる貧乏学生ですから、そこへきて私の話を聞いて書いておられた。非常にそれはいい文章でした。

それがみんなに非常な印象を与えておつたのがもたらうと思ひますが、どういふものか私が「名残りの銀時計」ということになつて、これが何かという新聞に出るんです。妙に私だけ残つたがそ

んなことはないんでね。文学部だけでも相当の数なんです。だいたい銀時計というのは三十人ぐらいあったんでしょ。

○三十人くらいいますね。

平泉 そうでしょう。記録はありますか。

○評議会の記録を見ていきますと、その年の優等学生となっていました。

平泉 そういうのを大学でとっておいてくださるといいですね。あとでまたお話ししますが、私と一緒に出た人が仁科芳雄。これは大事な人ですが、その仁科さんももらっているはずですよ。その他いろいろな人がありますよ。私と一緒にいるときは、満州国の総務長官で何とか言いましたね(武部六蔵)。その人の兄さんは文部省で局長をしておった。だけど、みんなどういふものか、亡くなった人もあるだろうし、失った人もあるだろうかしらんがこれです。これはこのケースそのままです。ここに御賜(ぎよし)と書いてある。

○こういう形でいただくわけですか。

平泉 ケースはこのままを高檀紙に包んで賜るんです。卒業式の式場、もとの法学部の大講堂、八角講堂の正面壇上に陛下はお立ちになる。このときは大正天皇さまがお立ちになる。それからその横に、私もそのときはわからなかったが、けだし侍従長でしょうな。侍従長がずっと下がってある。その侍従長からもらう。それからはっきり覚えていないが総長がお立ちになる、その総長の横には各学部長がずっとおられる。卒業生はこっちに並ぶでしょう。その最前列に優等学生というのがずっと並ぶ。各学部で文学部は文学部、法

学部は法学部で並んで、その前にそれぞれ優等学生がずっと並ぶ。

順序はどっちが先か覚えていなくても、式場係が読み上げるんですよ。私らの場合は文学部卒業学生百何名というのと、みんなさつと立つでしょう。右代表で私が代表で私の名前を呼ばれる。そこで進み出て陛下に最敬礼をする。文学部長がさつと進み出て、文学部だけの卒業証書を全部ひとまとめにして渡される。それを私はいただいて、かえるときにまた陛下の前に出て最敬礼してかえる。それがどっちが先か覚えていない。毫碌しました。

それから優等学生だれだれというのは一人ずつ呼ばれるので、一人ずつ出て陛下に最敬礼をして、総長の前であいさつをして。この恩賜の時計は陛下に最敬礼をして、それから侍従長の前へ出て、侍従長からこれを手渡される。それをいただいて、また陛下に最敬礼してかえる。そういうことだったので。

私は卒業生総代で一度、恩賜の時計で一度と、二度陛下の御前に進み出たんです。これは服部です。国産御奨励の意味で服部の時計をお使いになったんです。ほかは何の変わりもないんですが、この文字だけがあって。

これが困ったことにもう部品がないので、直すことは不可能です。これは時計の展覧会があって、そのときに服部が自分のものを出すということ、これをぜひお願いしたいという希望があったんですよ。みんなから頼みにきまして、その展覧会へ出しました。今の陛下は、これを非常に珍しがってご覧になったそうですよ。

これは卒業証書です。

○大きくて立派だな。

平泉 このときは文科大学長、上田万年。総長が山川先生。その当時は文学部ではなくて、上田文科大学長でしょう。文科大学が文学部になるということがこの少しあとに出るんです。大正七年までは法科大学、文科大学で、非常に嚴重なものですわ。上田先生のそのときの顔を私は今でも覚えていますよ。何ともいえんうれしそうな顔ですね、ちょうど親が子を見守るようなふうでしたね。先生はこういうわけかうれしくてたまらないように、その辺をそわそわして歩いておられて、平泉、よかったなあと言ってくださったんですよ。

しかし、行幸はなぜそこでとまるんですか。大正七年に終わって、それ以後おいでにならなくなった。止めて下さい。非常に重大です。〔録音中断〕大正七年にすでに大学が非常に難しい状態になったというこの原因は、大正六年十一月のロシア革命です。それまでもいろいろなことがあるけれども、爆発的になってきたのは大正六年の十一月からです。ここでその革命が起こったときに、東大では祝盆をあげたものがある。いちばん強いのが東大で、その次が早稲田だと聞いていますが、その東大のそういう仲間が、これからあと、ずっとのしてくるのは新人会です。考えてみると新人会というのは、それからあとにはなやかな存在で、そういう恐るべきその頂点にあったということはだれもいわない。日本の新しい傾向の扇動者の如くなって、ずっと振舞ってきたのが新人会で、それが結成されたのがこのときです。ロシア革命というものは、日本の歴史にとって非常に大きな関係のある出来事で、これを理解しないでは日本の大

正、昭和の歴史はわからない。そこですべてものは変わってくるんです。

昨日あなた方が帰られたあとで東京から電話があって、北海道大学のことも昨日初めて明瞭にわかったんです。総長が二人あるそのわけがどうしてもわからなかったが、夕べ知らせてくれてわかりました。北海道大学は北海道大学で遅れます。東京はやはりいちばん早い。北海道大学へ私が招かれて行ったのは昭和八年。そのときの北海道は大変な騒ぎなんです。どうにも収拾がつかない。そこで私を招きにこられたが総長が二人ある。こんなことはおよそ全国の変な大学は知らんけれども、帝国大学にして総長が二人あるなんていうところはないです。それが二人おられた。その二人が、全力を挙げてこれを何とかしようというんでしょね。私にお会いになったのも二人だし、私を招かれたのも二人だしね。その二人が常に一緒になって緊密に連携して、ものを処理していこうという態度でしたね。

大正七年に、行幸があつての卒業式も恩賜の時計も終わる。
○講堂を使つての卒業式がなくなってきましたね。

平泉 分割的になるんですね。分割して治めようというあれですわ。みんな集まったらどんなことが起こるかもしれない。これはほうぼうの高等学校でもみんなそうです。なるべく生徒を集めない。これはひとつの治める手段だったので。

それから小さいことかというと、それまでの卒業論文とそれからあとの卒業論文は違う。どう違うかというのと、それまでは全部日本紙に筆で書く。それからあとは洋紙にペンで書く。

ここに私の卒業論文があります。実物です。三上先生、萩野由之先生、黒板先生、田中先生。この紙に全部筆だ。私もびっくりしたんですが、卒業論文に先生は丸を付けておられるですよ。注目すべき文句だ。これはいい文章だわいというので。これに偉そうなことを書いているんだ。伊藤さんが見たら笑うだろうがね。

「即ちこの編、中世における社寺の社会的活動を討究、闡明せんことを期したるも、一は時間の不足よりし、一は卒業論文の性質よりして、先人の学説を網羅してこの問題に対する完全なる説明を与えず。すでに明らかなる方面はこれを先人の著述に譲り、われはただ従来研究のあるいは欠如し、あるいは不完全なる方面に向かつて討ち入らんとせり。蓋し、著書に大役二種あり。一は他人を啓発誘導せんとするもの、一は自ら胸臆の中懐を吐露するもの。而して卒業論文の如きは、ただ自己の能力を發揮すれば足る。故にこの一編、もしこれを巷間発行の著書としてはその説明はあまりに不完全、あまりに不統一の誇りを免れざるべし。ただそれ卒業論文なり。欲するところにおいて博洽の気を吐く、おそらくは不可なからんか。しかればわが研究は開拓せられたる領分の統括統治にあらずして未知の世界の侵略なり。しかもいまだ戦勝の凱歌にあらず。ただ突撃の喊声たらんのみ。全体の詳細なる究明、完全なる統一に至りては、これは他日に記す。

先生はびっくりして……。

○これは檄文だな。

平泉 実にこれは、あなたがいいことを言ったが檄文ですわ。

先生びっくり、これはひどいことを書いておるやつだって。

○その変わり目が大正七年ですか。

平泉 これが終り。それからこのときまでが発表が成績順。私は第一席になった。第二席が藤田亮策さん。第三席が九州帝大の教授になった竹岡（阿部）勝也。第四席が大正大学の教授になった藤本了泰。このときの大正七年の史学科というのは非常な豊作といわれた年で、人物がみんなそろっていたんです。この前が明治三十九年、高山樗牛、黒板勝美、宗教学の姉崎嘲風、哲学の桑木巖翼、あの辺のそうそうたる人がずらっとおるんです。

この次になると洋紙にインキで書くんだから、ガラッと変わってくる。これは苦労したもんですが楽しいものでした。

○そういうことは大学の中の雰囲気が変わったということですか。

平泉 そうです。つまり大学がそのときから崩れていく。これをやるだけの気魄というものがなくなってきた。それからもう一つ、これは明確に言えないけれども、このときまでが論文はすべて文語体、今後口語体になる。それはずいぶん議論があったことなんです。例えば「史学雑誌」で、外国でも学術的な論文はラテン語で書くんだから、「史学雑誌」などは文語体で書くがよいという説も、先生の間にはあった。しかし、時代は滔々として、わが文語体ではとてもだめだということで口語体になった。それはひとつは時代の流れで当然の道すじなのですが、同時に、ものを塞き止めるだけの気魄がなくなってきた。大学の卒業式などでもそうですよ。押し切って

やっついでいこう、この問題を前進して解決しようという気魄が、もうないんです。とにかく流されてきた。これから大学はずっと流される。そういう気風ですね。

○そういうことは研究室の中でも雰囲気が変わってきますか。

平泉 変わってくるんです。このときすぐではないが、やがて変わってくるのは女子を中へ入れるということです。それまでは女子を入れるということは思いもよらなかった。女というものは一段学力が低い、それを入れることは大学のすべての水準が下がってくるというので、非常に抵抗があったのですが、とにかく女を入れようということになった。私が講師になったのが十二年ですが、そのときに女の人が入ってきた。最初に入ってきた女の人は偉かったですよ。男子学生もたじたとするほどの人物がそろっていて、偉かったですね。時代の当然の流れであるが、当然の流れというのは、やはり一方に塞き止めるだけの力がない。何か、流されるという気分があるんですね。

○正規の学生ではなく、研究生ですね。

平泉 そうですかいな、よく私は知らんが。

(続く)